

談

話

室

## 心の底力

趣味は車中の読書。これは無趣味を白状しているようなものだが、私の車中読書はかなり徹底しているというか、ほとんど中毒のようなところがある。あえて列車による移動を選択する。先日も熊本から東京までの6時間で新幹線の車中で過ごした。飛行機では落ち着いて読めないからである。たまの休日の午後、文庫本を読むためにわざわざ電車に乗るということもある。つまり、車中以外では読めなくなっているのであり、ほとんど中毒なのである。

車中に持ち込むのは雑本のみで、しかも文庫か新書である。だから、世間で評判になった書物も、読むとすれば文庫になってからである。なによりも何冊も手軽に持ち運びができる。文庫化されたからには、それなりに評価された書籍という安心感もある。ときには粗悪品を掴まされたケースもあるが、実害はほとんどない。すぐに閉じるから時間の無駄にはならず、原則として古本屋の廉価本だから金銭の損失も小さい。

8月下旬に仙台に出張した。最速の新幹線で名古屋から仙台までの行程は3時間半と少々。すいぶん短縮されたものだが、それでも往復を合わせて自由時間はたっぷりある。実は、このときの出張の目的は宮城県の震災復興会議への出席であり、関連して県の農林水産関係の職員の皆さんとの前で1時間ほど話をさせていただくことであった。だから、なんというか、気楽な出張だったわけではない。会議の資料にも入念に目を通したし、話のためのレジュメも準備した。私なりに緊張感を持って仙台に向かったつもりである。

それでも車中読書は中毒である。やめるわけにはいかない。3冊の文庫本をバンに収めた。何冊か持ち込むのも私の流儀である。併行して読み進む。と言うことで、仙台出張に携行したのは3冊。そのうちの1冊が内田樹さんの『疲れすぎて眠れぬ夜のために』。どれどれ面白く読めるかな。

戦後日本のぼくたちはまるっきり「甘く」育てられているのです。

インパクト十分だ。眠るどころではない。戦後の復興を担ったのは明治20年

代から大正に生まれた世代であり、その世代が第一線から退いた70年代以降、この日本はダメになった。飢えた経験もなく、極限の貧困も知らず、近親者が虐殺された経験もなく、甘く育てられた戦後生まれ。これに対して究極の経験に現場で立ち合ったリアリストの世代が、日本の復興と繁栄を支えた。つまり食いすると、こんな論旨であった。車中読書もときとして衝撃的である。

仙台での会議と講演が終わって、もう1日滞在した。津波の被災地の農家を訪ねるためである。ある雑誌の座談会への出席をお願いしていて、その打ち合わせを行う段取りである。仮に仙台市のSさんとしておこう。地域の農業のリーダーのひとりである。じっくり話をお聞ききし、修復の目途の立たない揚水機場をはじめ、激しい災厄の現場も案内していただいた。言葉の端々にうかがわれる強靭な精神。穏和な表情から伝わってくる他者への行き届いた配慮。私自身の30余年の研究生活の中でも、とりわけ印象深いヒアリングとなった。

被災地には災いを転じて福となす権利がある。こんなふうに述べたことがある。深刻なダメージからの復興のプロセスでは、Sさんの地域のように、荒れ地としか言いようのない大地の上に新たな農業を再建することになる。時間がかかることも覚悟しなければなるまい。こんな被害の冷厳な事実は、しかし、地域の農業の過去の経緯に由来するさまざまな拘束が取り払われたことも意味している。ここに災いを転じる土台を見出すことができないか。こんな意味合いで述べたつもりである。

この考えにいまも変わりはない。けれども、災いを福となす土台については、もうひとつ忘れてはならないと思うようになった。それは災厄にたたき込まれた人々が手にしつつある強靭さであり、深い思いやりの心である。内田樹流に表現すれば、究極の経験に現場で立ち合ったリアリストの強さと奥行きということになろうか。あえて被災地ならではのスピリットとしておきたい。

ヒアリングも終わりに近づいた。Sさんに亡くなった娘さんことを座談会で話題にしてもよいだろうかとお聞きした。「いいですよ。私だけではないんですから」という答えが返ってきた。

(名古屋大学大学院生命農学研究科 教授 生源寺眞一・しょうげんじ しんいち)